

成果検証結果の概要

(エグゼクティブサマリー)

検証目的

本成果検証の目的は、以下の4つのリサーチクエストに基づき、書面調査、アンケート調査、インタビュー調査を通して SGH プログラムの5年間の事業活動の成果を検証し、次世代グローバル人材育成の促進に向けた提案を行うことである。

リサーチクエスト

- SGH プログラムは、この5年間でどのような教育プログラムを開発し、何を変えたのか？
- SGH プログラムは、受講生にどのような資質や能力の向上をもたらしたのか？
- SGH 受講は、どのように卒業生たちの進路選択や進学後の大学での学びに役立っているのか？
- 外部ステークホルダー（SGU 副学長、国内外連携機関、保護者、インターナショナルスクール・国際認証機関）はどのように SGH を評価しているのか？

調査方法

以下の3カテゴリ、下表の11調査データにもとづき分析した。

①は、平成26年～29年度の目標設定シート、および研究開発完了報告書の資料にもとづく。②～⑦は、WEB アンケートにより、調査協力者が直接 WEB サイトから入力したデータにもとづき分析した。インタビュー調査⑧、⑪は、研究班からの調査依頼に承諾が得られた SGU、インターナショナルスクールを訪問し、⑨、⑩は、アンケート調査④、⑦で協力意思が表示された卒業生、海外連携校を調査対象とした。

調査機関

筑波大学 SGH 研究班

カテゴリ&調査	対象	n
I. 書面		
①平成26年度～29年度書面	H26,27,28SGH 指定校	123
②WEB 書面	H26,27,28SGH 指定校	123
II. アンケート		
③指定校事業成果検証	H26,27,28SGH 指定校管理者	119
④卒業生	H26SGH 指定校(受/非受講生)	837
⑤卒業生の保護者	H26SGH 指定校受講者の保護者	614
⑥国内連携機関	H26 指定校の国内連携機関	84
⑦海外提携校	H26,27,28SGH 指定校海外連携校	78
III. インタビュー		
⑧SGU 副学長	SGU トップ型・牽引型校副学長	27
⑨卒業生	調査④に協力した卒業生	36
⑩海外連携校	調査⑦に協力した海外連携校	11
⑪インターナショナルスクール・国際認証機関	Council of International Schools, Japan Council of International Schools の日本所在校	4

I. 書面調査結果

結果概要

- ・経年的に、着実に成果指標の向上が見られる。
- ・SGH 受講生は非受講生に比べて、顕著な学習成果を上げている。
- ・海外留学希望や海外キャリア志向は停滞気味である。
- ・成果普及に向けた様々な取り組みがなされている。
- ・教員の課題研究指導、生徒の英語能力の向上が改善点として挙げられている。
- ・質問項目の尺度設計や重複を見直し、WEB 書面調査に切り替えることが推奨される。

①H26～H29 年度書面調査

毎年末に全指定校を対象として実施される①「目標設定シート」、②「研究開発完了報告書」を時系列的に分析し、SGH プログラムの研究開発の進捗状況について、全体傾向をまとめた。

①目標設定シート

1. 全体傾向

- ・年度を経るごとに各指標の平均値は右肩上がりの傾向を示す。
- ・全ての目標達成率は 50%を超え、100%を超える項目もある。

2. SGH 受講生と非受講生の比較

- ・SGH 受講生は、非受講生に比べ、自主的活動、表彰機会、英語能力得点が高く、経年的に両者の格差が拡大している。
- ・海外留学、国際キャリアを志望する SGH 受講生(6割)は、非受講生より 20 ポイント高い。

3. 横這い・微増を示す項目

- ・将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合
- ・帰国子女・外国人生徒の受け入れ数
- ・海外大学進学者数

②研究完了報告書

「研究開発概要」

- ・評価方法、カリキュラム、教育課程の充実が必要である。
- ・総合的な学習の時間として課題に取り組んでいる。

「管理機関取組支援」

- ・発表会を開催し、研究成果を公表し、成果普及している。
- ・事務作業の軽減のため、事務職員を雇用している。
- ・海外ネットワーク構築、調査、引率の為に、教員を海外派遣している。

「研究開発実績」

- ・ポスターセッションや発表会を実施している。
- ・連携する大学や企業を訪問して現地調査をしている。
- ・英語プレゼンテーションやグループディスカッションをしている。
- ・日本の文化を学び、外国人に紹介している。

「目標の進捗状況、成果、評価」

- ・「自主的な社会貢献や自己研鑽」は生徒の自己評価である。
- ・国内外の大学や高校、企業との連携を行い、大学教員から指導を受けている。

「次年度以降の課題及び改善点」

- ・課題研究に対する教員の指導体制
- ・英語力のさらなる充実を図る

結果概要

- ・S～Aレベルの高い研究活動の成果を達成している。
- ・経年効果により、目標達成の実現度が高まる(SGH 間の繋がりが、国際会議の開催等)。
- ・SGH 受講生は、非受講生に比べ、英語力、SGU、海外進学率が高い。
- ・成果発信に繋がる HP の整備が課題である。
- ・教員の英語力、業務過多、発信力の改善が恒常的な課題として挙げられている。

②WEB 書面調査

H29 年度までの書面調査のファイル入力による誤記入や冗長性を改良するため、H30 年度は、項目内容を精査し、WEB 書面調査による目標設定シート項目、開発完了報告書のデータ回収を行った。以下に、分析結果の概要をまとめる。

1. 全体概要																											
SGH に係る 研究開発目標に対しての本年度成果への評価は概ね高く 、平均で、「A(現状の取組継続により目標達成可能)」と「S(目標以上の取組状況)」との間の 3.17 である。																											
2. 経年効果(採択年度間比較)																											
<ul style="list-style-type: none">・全体的に指定期間が長い学校の方が評価の高い傾向があり、経年とともに、着実に目標達成に向かっている。・指定期間が長い学校の方が、連携／交流先 SGH 校が多い傾向が見られ、経年とともに SGH 校間のつながりも深まっている。・指定期間が長い学校の方が、国際会議の開催回数、日数ともに多い傾向が見られ、SGH 校としての経験を積む中で、国際会議の開催に踏み出す学校が増えている。																											
3. SGH 受講/非受講生間比較																											
<ul style="list-style-type: none">・全校の 66%を占める SGH 対象生徒が、海外大学進学者全体の 86%を占めていることから、SGH 対象生徒が海外大学を進学先として選択する傾向は強い。・SGH 対象生徒が、SGU 対象大学進学者全体の 74%を占めていることから、SGH 対象生徒が SGU 対象大学を進学先として選択する傾向は強い。・SGH 対象生徒の方が明らかに高い CEFR レベル割合を示す。加えて、SGH 指定期間が長いほど、達成割合が上がる傾向がある。SGH への取組により、特に SGH 対象生徒の英語力が着実に伸長していることがうかがえる。CEFRB1 レベル SGH 対象生徒(46%)、SGH 対象外生徒(17%) CEFRB2 レベル SGH 対象生徒(15%)、SGH 対象外生徒:(5%)																											
4. 課題																											
①現状の課題																											
<ul style="list-style-type: none">・外国語によるホームページの整備率は 9 割以上だが、更新なし、または、1 年に 1 回程度の更新頻度の学校が半分以上を占める。・年度間課題変遷																											
<table border="1"><thead><tr><th>カテゴリー</th><th>前年度からの改善</th><th>次年度への改善</th></tr></thead><tbody><tr><td>プログラム内容</td><td>論文作成、英語力、カリキュラム</td><td>思考力、説明力、コミュニケーション力</td></tr><tr><td>教員</td><td>スキル向上、業務過多</td><td>スキル向上、業務過多、教員同士の連携</td></tr><tr><td>外部との連携</td><td>高大連携、外部資金</td><td>連携先確保、地域連携</td></tr><tr><td>普及活動</td><td>広報活動、発信力</td><td>学内普及、発信力</td></tr><tr><td>課題研究</td><td>課題研究指導の質、授業時間の確保</td><td></td></tr><tr><td>海外研修</td><td>探究活動との連動</td><td></td></tr><tr><td>評価基準</td><td>評価方法、数値化</td><td></td></tr><tr><td>生徒</td><td></td><td>自信・行動力不足、SGH の意義理解</td></tr></tbody></table>	カテゴリー	前年度からの改善	次年度への改善	プログラム内容	論文作成、英語力、カリキュラム	思考力、説明力、コミュニケーション力	教員	スキル向上、業務過多	スキル向上、業務過多、教員同士の連携	外部との連携	高大連携、外部資金	連携先確保、地域連携	普及活動	広報活動、 発信力	学内普及、 発信力	課題研究	課題研究指導の質、授業時間の確保		海外研修	探究活動との連動		評価基準	評価方法、数値化		生徒		自信・行動力不足、SGH の意義理解
カテゴリー	前年度からの改善	次年度への改善																									
プログラム内容	論文作成、英語力、カリキュラム	思考力、説明力、コミュニケーション力																									
教員	スキル向上、業務過多	スキル向上、業務過多、教員同士の連携																									
外部との連携	高大連携、外部資金	連携先確保、地域連携																									
普及活動	広報活動、 発信力	学内普及、 発信力																									
課題研究	課題研究指導の質、授業時間の確保																										
海外研修	探究活動との連動																										
評価基準	評価方法、数値化																										
生徒		自信・行動力不足、SGH の意義理解																									

朱色…継続的な改善が必要な項目

Ⅱ. アンケート調査結果

主要な課題と⇒対策案

①アクションラーニングの学習機会の拡大

⇒SGH プログラム以外の科目にも恒常的にアクションラーニングを取り入れる全校的な取組みを促進する。

②SGH 校プログラムの学習内容の標準化

⇒学校間や管理機関主導による研究会を通してカリキュラムを標準化する。

③受動型から能動型へのグローバルコンピテンシー、マインドセット育成方針の導入

⇒教育プログラムにおける「多様な価値観の受容」、「協力関係構築」という受動的な基準に重点を置き、より積極的な自己意見の表出や討論による問題解決の手法を学習に取入れる。さらに、海外連携校との恒常的な共同授業等によるグローバル環境を通して生徒の発信型意識を醸成する。

④プログラム運営に係るスタッフ育成、評価基準の明確化、教材・教育方法の情報支援

⇒地域のグローバル志向型高校とのコンソーシアムを形成し、スタッフ研修の共同開催や教材の共同開発を遂行する。

③指定校事業成果検証調査

指定校アンケートの結果から、SGH プログラムが達成している成果と、今後の課題が浮き彫りになった。以下に、それぞれの要点をまとめ、主要な課題の解決に向けた対策案を提示する。

成果	課題
人間力、国際的な知識、思考力、判断力といったソフトスキルが 開発されている。	アクションラーニングに関連した「ディスカッション」(月1回)、「課題研究レポートの書き方」(学期1回)は低調であり、開講回数の拡大が望まれる。
グローバル志向、海外や異文化への興味関心が向上している。	採択年度により重視する教育方法が異なり(H26:英語コミュニケーション、H27:課題研究やプレゼンテーション)、SGH 校として一定の標準化が望まれる。
進学する際、学びたい内容を考察する傾向が高まる。	指定校が考える「グローバルコンピテンシー」上位は、「多様性受容」、「他者理解」、「立場や意見の尊重」であり、国際的に見て、日本の高校生の弱点である能動型コミュニケーションの重要性が指摘される。
教員の「思考力・表現力・判断力」指導能力、生徒の「国際的な知識や意識が向上」が共に高い学校は、総合評価が格段に高くなる。	生徒の「自分に自信がある」、「短所よりも長所への着目」といった能動的な行動様式の達成度が期待を下回っている。
SGH と SSH のグローバルとサイエンスを連携した教育プログラム開発は有用性が高い。	卒業生の国内大学の国際的な領域への進学が拡大する一方、海外大学への挑戦は極めて少数である。
海外志向、探究学習への興味関心が高い生徒の入学が増加している。	今後の SGH プログラム運営で果たすべき必要は、「プログラムを実施する教員・専門スタッフの能力育成」、「プログラム成果の評価基準の明確化」、「プログラムに利用する教材・教育方法に関する情報支援」であり、質的拡充が求められている。

主要な課題と⇒解決案

①海外大学留学者数の低迷

⇒SGH プログラムを通して獲得した視野や能力、本質的な勉学志向を発揮するため、希望する卒業生の海外留学を後押しするため、一校だけでなく、地域や全国レベルで海外大学情報を提供するような仕組みを構築し、国際的な学修機会に役立つ情報を提供する。

②全員受講生のプログラムの有効性の低評価

⇒基礎的なグローバル教育は必須としても、専門的な内容については、選抜した生徒に限定することにより、動機付けの高い生徒を対象としたプログラムを提供でき、高い学習効果や費用対効果が見込まれる。

③「自分に自信がもてる」能動的なコンピテンシー、マインドセットの低得点

⇒指定校調査の結果を裏付けており、教育の方針や方法について再構築する。

④語学力(英語)に対する 自信不足

⇒語学力は、コミュニケーションツールであり、将来のさまざまな機会を広げるためにも英語以外の科目の英語化により、学内に恒常的な外国語(英語)環境を提供する。

④卒業生アンケート調査

卒業生調査の回答者について、「同じ学年が全員受講したグループ(全員受講)」、「一部の選抜された生徒だけが受講したグループ(一部受講)」、「SGH プログラムを受講していない(非受講)」の3グループに分類し、受講形態の違いから、SGH プログラムの成果と課題について分析した。また、主要な課題の解決に向けた対策案を提示する。

成果	課題
SGH 受講者は非受講者に比べて、大学進学基準として「提供するカリキュラムが魅力的である」ことを重視している。	卒業生の98%は、国内大学に進学している。2%の海外進学者は全員が欧米の大学に進学しており、留学先の6割が北米。
「プレゼンテーション」、「レポートのまとめ方」、「調査データ収集・分析」というジェネリック(一般的)な知識やスキル修得への評価が高い。	「全員受講」は、「選抜受講」や「非受講」よりもSGH プログラムに対する有効性の評価が低い。
受講生は、「自分と異なる立場の価値観の尊重」、「相手との協力関係の構築」コンピテンシー獲得の得点が高い。	全体的に「自分の意見を効果的に相手に説明する」得点が他のコンピテンシーに比べて低い。
受講生は、「外国の様々な異文化に触れることは楽しい」、「様々な外国へ行ってみたい」というグローバルマインドセットの得点が高い。	全体的に「自分に自信がある」、「自分の短所よりも長所に目を向けている」という自身の特徴や長所のアピールが、他のグローバルマインドセットの得点に比べて低い。
「海外研修が学びにつながった」、「英語を使う機会が多く、よかった」、「受講している。視野が広がった」、「SGH プログラムで学んだことが大学生活で役立っている」という肯定的な意見の出現頻度が高かった。	「教員の研修が必要」、「(受講生の)やる気がないと意味がない」という意見の出現頻度が高い。
将来の海外勤務について、全体の54%が「国・地域によっては働きたい」と回答しているが、「どんな国・地域でも働きたい」は選抜受講(21%)が、全体受講(13.5%)、非受講(11.3%)を10ポイント上回っている。	グローバル人材育成の開始時期については、1位:小学校(170件)が、2位:高校(101件)を大きく引き離しており、早期育成開始の必要性が示されている。
	海外で働きたくない主要な理由は、「語学力に自信がない」(全体53%)である。非受講(58%)、選抜受講(54%)、全員受講(50%)であり、全体として語学力への不安が高い。

主要な課題と⇒解決案

①SGH 校のアイデンティティの確立の必要性

⇒SGH 指定期間の終了後も研究開発を通して得られた経験や知見を蓄積し、発展させるため、PDCA による定期的な自己検証の仕組みを導入する。

②能動的なコンピテンシー、グローバルマインドセットの育成

⇒卒業生調査の結果を確認しており、学校の教育方針、方法を再構築する。

③保護者への情報提供や入試との関連性強化

⇒保護者の理解と協力を得るため、保護者のプログラム参画や AO 入試、推薦入試における SGH プログラム活動を組み込む方策を検討する。

⑤卒業生の保護者アンケート調査

間近で子どもたちを観ている保護者の視点から、高校時代に SGH プログラムを受講した卒業生が、高校～大学を通して、意識面、行動面でどのような変化の様子を認識しているのかについて分析した。

成果	課題
子どもの SGH プログラムへの満足度は、「満足している様子だった」が 34%で最も多く、「とても満足している様子だった」が 22%、「どちらかと言えば満足している様子だった」が 20%と、合わせて 76%が満足だったと回答している。	全体の3割が、「入学後に SGH プログラムの存在を意識」しており、「SGH 校であることが入学志望の一つであった」のは2割に留まる。
SGH プログラムに対する経済的負担は、「適度であった」が 42%、「多かった」は 12%、「少なかった」は 9%。「負担はなかった」は 37%にのぼる。	育成された「コンピテンシー」13 項目中、特に高い 3 項目は、「相手が意見を述べやすいように心がける」、「自分と異なる立場の人の価値観を尊重する」、「反対意見にも耳を傾ける」であり、能動的なコンピテンシーが中心であった。
SGH プログラムの継続要望は、「継続してほしい」が 68%、「どちらかと言えば継続してほしい」が 19%であり、合わせて 87%を占める。	「グローバルマインドセット」11 項目中、特に高い 3 項目は、「外国の様々な異文化に触れることは楽しいと思う」、「自分のやりたいことを見つけ、それに情熱を傾けたい」、「様々な外国へ行ってみたい」であり、指定校調査、卒業生同様、「自分に自信がある」、「自分の短所よりも長所に目を向けている」という自身の特徴や長所をアピールするグローバルマインドセットは低位に位置している。
	今後の課題として、十分な情報提供、大学入試準備との兼ね合いが指摘された。

**主要な課題と→解決案
(国内連携機関)**

①一過性に留まらない、継続的なグローバル教育プログラム設計

→外部機関との協働により、標準化でき、汎用可能なコンテンツを開発する。

②能動的なコンピテンシー、グローバルマインドセットの育成

→他の調査結果を踏襲しており、能動的な意識や行動の育成に向けて、学校の教育方針を伝えるとともに、育成方法についても外部機関からの助言を受ける。

③高校との連携によるプログラムの充実化

→外部連携プログラムの一層の有効活用に向けて、管理機関による専門スタッフの雇用、研修制度、評価制度の拡充を図る。

**主要な課題と解決案
(海外連携校)**

①多国籍国際連携の推進

→日本の高校が国内他校の生徒向けに国際協働プログラムを相互に開放し、生徒の海外研修機会を拡大する。

②通年の国際協働授業の実施

→遠隔通信を用いて、年間を通して海外提携校との共同授業や海外研修に向けた生徒間の事前学習を行う。

③教職員の国際化

→上記①、②の推進のためにも高校教職員の英語を含むコミュニケーション能力の向

⑥国内連携機関アンケート調査

国内連携機関の SGH プログラムへの協力状況や実施結果をとおして、実社会との連携成果を分析するとともに、今後の運営面の課題について提言をまとめる。

成果	課題
SGH 参画期間は、「1 年以上」が 52%で最も多く、次いで「スポットで 1 日のみ」が 19%で多い。SGH 参画期間と回数では、1年以上、10 回以上が 67%	高校との関係で組織と高校との提携関係は 44%に留まり、高校から組織への一時的な依頼が 43%が高い。
プレゼンテーション(58%)、プロジェクト(イベントやフィールドワーク)の提供(69%)の頻度が高い。	開講言語は、日本語(72%)、英語(22%)と圧倒的に日本語開講で実施されている。
生徒のプログラムに対する関心度合い(83%)が高い。	他者の立場の尊重や複数の視点に配慮する「コンピテンシー」や「マインドセット」の重要度に対する意見が高く、相対的に能動的な側面への重要度が低い。
SGH プログラムに対する協力への積極的な参加推奨(81%)が高い。	・高校とのより密接な連携の必要性(77%) ・プログラム編成段階から参画希望(73%) ・組織や社会からの評価の重要性(76%) ・専門的スタッフによる支援の必要性(58%) ・外部協力者への研修機会の必要性(53%)
SGH プログラムの次世代グローバル人材育成への有用性(89%)が高く評価されている。	

⑦海外提携校アンケート調査

国際交流パートナーの視点から、SGH 指定校との国際協働による両国の次世代グローバル人材育成の成果や今後の一層の関係性向上に向けた提言をまとめた。

成果	課題
SGH 連携校との国際協働プログラムに満足している(96%)	海外連携校の 2 割は、日本を含む 10 カ国以上の国際連携、3 割が 10 校以上の海外連携校との多国籍国際連携を締結している。
連携校との国際協働が日本の高校生グローバル教育に役立っている(97%)	2割以上が、英語を含む二言語教育、4割以上が異文化を経験する学習機会を提供している。
SGH 連携校との国際協働が現地校のグローバル教育にも役立っている(88%)	年1回の現地訪問だけでなく、年間を通して遠隔通信を活用した国際共同授業のようなフォローアップ教育が重要であろう。
	日本と現地の教員間の一層のコミュニケーションを図ることが大切である。

Ⅲ. インタビュー調査結果

主要な発見

①附属高校の有無による連携実績や認識の差異

⇒附属高校を擁する SGU は擁さない SGU に比べて、多様なプログラムを提供している。また、附属高校の有無が SGH との連携チャンネルや認識の差異に表れている。

②テーマ設定が SGH の課題

⇒具体的なテーマ設定が見えやすい SSH に比べて SGH は焦点が絞りにくいという意見がある。一方、SGH は英語での表現力が特長である。SSH との連携により両者の補完的な成果が期待される。

③入試との連動の重要性

⇒SGH の課題研究の成果を入試選考に取入れることが高大連携の促進にとって重要な要素である。

⑧スーパーグローバル大学副学長インタビュー調査

高大連携によるグローバル人材育成の観点から SGU(スーパーグローバル大学)副学長へのインタビュー調査を実施した。調査協力大学は、附属高校を擁する 15 校、附属高校を擁さない 12 校に分類され、①実績事例、②評価・コメント、③今後に向けた計画や提案について、附属学校の有無による特色、および共通回答についてまとめた。

	附属高校(あり)	附属学校(なし)	共通
①実績事例	<ul style="list-style-type: none"> 大学の正規授業を附属高生に開放 アドバンスドプレイスメント(課題研究を入試考慮) 大学教員による附属高校での授業 研究室体験 大学単位付与 高大連携した探究型プログラム開発 高校教員のための教育法研修 	<ul style="list-style-type: none"> 高校生の大学授業への聴講受入。 高校生にポスター発表の機会を提供 	<ul style="list-style-type: none"> 高校の校長との高大連携に関する意見交換会の開催 大学院生を高校に派遣し、英語(留学生)、研究メソッドやプレゼンテーションに関するワークショップの開催
②評価・コメント	<ul style="list-style-type: none"> 高校生の段階から交換留学を目指してほしい 一部の高校の先生に集中している負担を学校全体で分担してもらいたい 高校で出講している大学教員もよい刺激を受けている 附属高校だけを優先するのは不公平 	<ul style="list-style-type: none"> 高校と大学のカリキュラムの違いや通学の物理的障害の解決が必要 高大連携の窓口が分からない 理系大学のためか SGH から要請依頼が来ない SGH は何ですか? というくらい知らない 高校は独自のビジョンがあり協力要請は少ない 	<ul style="list-style-type: none"> SGH はテーマが多岐にわたるので、課題を絞るのが難しい 多様な題材を取り上げて英語で発表することは SGH の特長
③今後の計画・提案	<ul style="list-style-type: none"> SGH と SSH が連携して、トピックや地域ごとの活動ができる 高校生が大学単位を取得できる制度を推進するとよい 	<ul style="list-style-type: none"> 情報が入ってこないが、照会があれば協力する グローバルプログラムで希望があればいくらでも受入れる 	<ul style="list-style-type: none"> 高大連携の結果を入試に反映できないことが問題 SGH の課題研究を入試選考に反映すべき

主要な発見

①教室内学習では得られない体験を通じたコミュニケーションスキル・マインドセットの獲得

海外現地へ行き、現地での見聞や人的交流を通して、コミュニケーションやマインドセットを体験学習している。

②大学入学後に役立つ判断基準や人的ネットワーク形成

SGH プログラムを通して、国際的な視点から岐路における選択基準を身に付け、人的交流を広げるのに役立っている。

③継続的な改善活動の重要性

SGH はスタートして5年目であり、試行錯誤の中でさまざまな取り組みをしてきた。これまでの成果にもとづき、持続的な発展に向けて、プログラムの継続と学校や卒業年度を超えた卒業生ネットワークを通じた改善活動の継続性が重要である。

⑨卒業生インタビュー調査

卒業生アンケート調査の巻末に記したインタビュー調査への協力依頼に応諾した卒業生を対象として、高校時代に SGH プログラムを経験し、現在、大学生(大学院生)となったかれらの視点から、以下の3点について聞き取り調査を行った。

①SGH プログラムの意義は何だったのか？

②SGH プログラムで学んだことは、進路選択や大学での学びにどのように役立っているのか？

③SGH プログラムの今後の改善点は何か？

フォーカスグループインタビュー(座談会形式)6名と、遠隔通信インタビュー(個別)30名の調査結果についてまとめた。

①SGH プログラム受講の意義

- **リアリティのある情報や視点の獲得**: 普段の高校生活では得られない、現地のリアルな状況や生活者の暮らしぶりを見聞できたこと。
- **自発性、多様性理解といったマインドセットの醸成**: 学習に対する姿勢や自分と異なる意見や考え方に対応するマインドセットを修得したこと。
- **コミュニケーションスキルの獲得**: 暗記型の高校教育では涵養できなかったコミュニケーションスキル、プレゼンテーションスキル、レポート作成スキルを身に着けたこと。

②SGH プログラムで学んだことが現在の大学(大学院)で役立っていること

- **大学進学以降のさまざまな選択時のよりどころ**: 大学進学、入学後の研究テーマの決定等、岐路に立った時の判断基準のよりどころとなっている。
- **大学の講義、研究面でのアドバンテージ**: ディスカッションやレポート作成、プレゼンテーションといったスキルが大学進学後の授業や研究活動に役立っている。
- **交友関係の広がり**: SGH 参加者同士のつながり、海外研修時に知り合った外国人、通学している大学の留学生など、多様な人的ネットワークが広がった。

③SGH プログラムをさらに充実するために改善すべきこと

- **SGU プログラム関係者間の交流機会の提供**: SGH プログラム参加者同士が学校間や世代間を超えて交流を継続できる機会を設けること。
- **プログラム内容の改善**: SGH 活動にかかる時間を増やすこと、海外研修における調査時間を増やすこと。また、海外研修参加にあたり、本人の希望によるプログラムや研究テーマ選択ができるようにすること。
- **海外研修プログラム参加要件の改善**: 海外研修への参加について、参加可能人数が少ないこと(量的)、選抜基準が本人の意欲や問題意識ではなく、成績で決まる等(質的)、質量両面の改善が要望される。
- **指導教員の考え方やフィードバック**: 担当する教員の考え方にばらつきや、作成したレポートに対するフィードバックが少ない点の改善が要望される。

主要な発見

①プログラム内容

- ・語学力を補完するようなプログラム内容(芸術、スポーツ)開発
- ・異文化を超えるような共通テーマ(生活スキル・サバイバルスキル、社会的公共性)開発
- ・理系と文系を融合したプログラム開発
- ・第三国での現地集合による国際協働プロジェクト実施

②プログラム運営

- ・運営者間のコミュニケーションの向上
- ・開講日程の調整に向けた相互協力
- ・双方の教員向け国際協働ワークショップの開催
- ・日本人生徒の英語力の向上

⑩海外提携校インタビュー調査

海外提携校アンケート調査の巻末に記した、インタビュー調査への協力に承諾した学校から、地域多様性(カナダ、カンボジア、中国、台湾、ニュージーランド、台湾、フィリピン、米国)を考慮して選抜した8校の提携校への遠隔通信による聞き取り調査を行った。①プログラム内容、②プログラム運営に関する意見や提言をまとめた。

①プログラム内容

- ・日本人の英語能力に照らし合わせて、芸術やスポーツなどのプログラムが友好関係を築くのに役立つだろう。
- ・パートナー校の生徒たちがともに成長できるような「生活スキル」、「サバイバルスキル」のような基本的なスキル、老人へのサービスなどの社会的公共性のあるプログラムを共に学べる機会を組み込めるとよい。
- ・プログラムにおけるコミュニケーション・文化と科学的なプログラムのバランスを図るとよい。
- ・一方向、双方向の訪問だけでなく、国際連携校同士が第三国で協働研修を行うのもよいのではないか。
- ・遠隔コミュニケーションを通して、生徒間の十分な渡航前学習を重ねることが、プログラムの成功に通じると思う。

②プログラム運営

- ・SGH プログラムに関する情報をもっと共有してほしい。
- ・役所的な制度を改善してほしい。
- ・日本と現地の学期の違いから、他の現地プログラムと日程が重なる場合がある。双方のスケジュールを調整して、両者が集中できる時期をよく検討することが重要である。
- ・日本人の生徒の訪問期間を長くとももらいたい。
- ・プロジェクト推進に向けて、日本人教員のコンピュータ等の技術面のスキル向上を図ってほしい。
- ・交流関係が非公式であり、将来的により明確で構造化された協働活動が図られることが望まれる。
- ・プログラム運営に関する双方の教員が参加するワークショップを開催することが望まれる。
- ・プログラム内容の準備にもっと時間をかけることにより、一貫性の確保や学習効果が高まるであろう。
- ・プログラムの恩恵を引き出すために、日本人生徒の英語能力を向上してもらいたい。
- ・日本人生徒が一般的におとなしく、積極的に会話に参加しないこと、帰国子女の生徒とそうでない生徒の間の英語レベルの差が大きい。

主要な発見

①インターナショナルスクールの視点

- ・国際認証機関のメンバーシップ獲得による様々な教育資源や情報へのアクセスのメリット
- ・メンバーシップ維持に向けた人的、経済的コスト
- ・日本の高校教育の暗記型教育からの転換示唆とインターナショナルスクールとの交流機会案

②国際認証機関の視点

- ・高水準の国際教育の質的保証にもとづく加盟校間のネットワーク構築
- ・加盟校の教育水準の向上に向けた相互学習機会の提供
- ・国際認証機関としての水準維持、向上に向けた研究活動の推進

⑪国内所在インターナショナルスクール・国際認証機関インタビュー調査

グローバル人材の持続的な育成プログラム開発と運営の実現には、教育の質的保証の観点から、教育機関同士の連携やプログラム内容の標準化が不可欠といえる。国際教育の先駆的な国際認証機関である CIS(Council of International Schools)、および JCIS(Japan Council of International Schools)に関連し、日本に所在する関係機関へのインタビュー調査を通して、①インターナショナルスクールの視点、および②国際認証機関の観点から、国際認証機関の役割と運営に関する聞き取り調査を行った。

①インターナショナルスクールの視点

1. 国際認証機関に認証されるメリット

- ・国際認証機関ネットワークへの参加による教育資源や情報収集
- ・国際的な質的保証にもとづく信頼と地位
- ・恒常的な改善にもとづく生徒の学力向上
- ・メンバー校間の国際ネットワークを活用した海外研修機会

2. 認証機関のメンバーシップ継続のために生じるコスト

- ・認証プロセスに要する作業量
- ・財務的な投資(メンバーシップ費用、受審費用)

3. 日本の高校へのコメント

- ・暗記中心の教育を改革し、生徒の自律性や創造性を伸ばすような教育への転換
- ・学校運営の評価基準を見直し、教員の授業以外の負荷も功績として考慮すること。
- ・インターナショナルスクールとの交流やコミュニケーションの促進

②国際認証機関の観点

認証機関の役割

- ・質的保証にもとづく、高い教育水準のインターナショナルスクールのネットワーク構築
- ・カンファレンスにおける加盟校の研究開発の発表を通じた、高水準の国際教育の発展に向けた支援活動
- ・加盟校生徒の有力大学への進学への橋渡しに向けた、国際認証機関としての審査基準の維持、向上に向けた研究活動

4つのリサーチクエストへの回答

本成果検証のまとめとして、冒頭に提示した4つのリサーチクエストへ回答を以下に示す。

- **SGH プログラムは、この5年間に、どのような教育プログラムを開発し、何を変えたのか？**
 - ディスカッションやディベートのような生徒参加型の授業運営の導入を加速化させ、講義型、暗記型の教育から、生徒が自主的に探求学習し、その実行に必要な調査方法、プレゼンテーション、論文作成等の知的技法を学ぶプログラムを開発した。さらに、海外フィールドワークを通して、グローバルな視点から、さまざまな国際的課題について、生徒自身が解決方法を考え、提案する機会を提供した。
- **SGH プログラムは、受講生にどのような資質や能力の向上をもたらしたのか？**
 - SGH 受講生は、非受講生に比べて、より高い英語能力やグローバルな問題解決に必要なコンピテンシー、マインドセットを修得している。これらは、知識やスキルだけでなく、ライフイベント上のさまざまな岐路に直面した時の重要な判断基準を形成している。
- **SGH 受講は、どのように卒業生たちの進路選択や進学後の大学での学びに役立っているのか？**
 - SGH 受講生は、進学後の学習や研究において、SGH プログラムで培った調査技法やプレゼンテーション能力を有効活用している。また、コミュニケーション能力は、勉学面だけでなく、外国人を含めた人的ネットワーク形成にも役立っている。
- **外部ステークホルダー（SGU 副学長、国内外連携機関、保護者、インターナショナルスクール・国際認証機関）はどのように SGH を評価しているのか？**
 - 置かれた立場や関係性の距離にもよるが、いずれのステークホルダーも高校生からの次世代グローバル人材育成の有用性と重要性を十分に認識している。管理機関や指定校による適切なステークホルダーマネジメントにより、様々な資源を組合せ、有効活用することにより、効果的なグローバル教育を実現することが期待される。

結語

SGH プログラムは、スタートして5年目の新しいプログラムであり、開発途上にあるといえる。一方、この間の研究開発活動を通して、グローバル人材育成プログラムの内容と運営の経験知、国内外のネットワークという有形無形のリソースが形成されている。今後の継続的な改善活動、SGU との高大連携、SSH との水平連携により、将来の日本を牽引する次世代グローバル人材育成に貢献することが大いに期待される。

調査機関

筑波大学 SGH 研究班

<調査設計>

永井裕久(研究代表者・筑波大学ビジネスサイエンス系教授
・附属学校教育局特命補佐)

椿広計(統計センター理事長・筑波大学名誉教授)

Benton, F. Caroline(筑波大学副学長・理事:国際担当
・ビジネスサイエンス系教授)

木野泰伸(筑波大学ビジネスサイエンス系准教授)

川崎将男(株式会社アルゴ取締役)

朱藝(筑波大学ビジネスサイエンス系助教)

<研究倫理>

濱本悟志(筑波大学附属学校教育局教授・次長)

<調査協力研究者>

平井孝志(筑波大学ビジネス科学研究科教授・国際経営
プロフェッショナル専攻長)

Magnier-Watanabe, Remy(筑波大学ビジネスサイエンス系准教授)

Deseatnicov, Ivan(筑波大学ビジネスサイエンス系助教)

Tan, S.L. Caroline(筑波大学ビジネスサイエンス系准教授)

Maswana, Jean-Claude(筑波大学ビジネスサイエンス系准教授)

顧俊堅(筑波大学ビジネスサイエンス系助教)

Kucheryavyy Konstantin(東京大学公共政策大学院助教)

<外部調査協力研究者>

高橋潔(立命館大学心理学部教授)

義村敦子(成蹊大学経済学部教授)

鈴木美枝子(いわき短期大学幼児教育科教授)

小澤伊久美(国際基督教大学教養学部講師)

<分析協力者・分析補助員>

黒木弘司(筑波大学非常勤職員)

株式会社シタシオンジャパン

GOB Incubation Partners 株式会社

<調査事務局>

富樫晶子(筑波大学東京キャンパス事務部企画推進課国際担当係長)

増尾はづき(筑波大学東京キャンパス事務部海外交流アドバイザー)

高田智子(筑波大学東京キャンパス事務部事務補佐員)